

輝く瞳を前にして

堀 数馬

八十八年の歴史に輝く同志社も、あるときは左に、あるときは右に揺れ、浮き沈みつつも、女子部は、その動揺浮沈も比較的おだやかで、同志社教育を力強く堅持し続け、発展充実の道をたどっているものと思われまます。ここに、多くの輝く瞳を前にして語ったいくつかを赤面を覚えつつここに繰りかえし、それによって女子中高の姿と歩みを想像していただくことになればと思うのであります。

三つの光―就任式に―

惜しまれつつ辞任される永島校長は、歴代校長の築かれた基礎の上に、さらに高めるべきを高め、深めるべきを深め、拡張すべきものを拡張し、充実すべきものを充実し、学園の向上発展のため賢明

にして堅実、最大の努力を捧げられたのであります。それは本校の宗教々育、教科指導、施設並びに設備において明らかに現実的に見ることができると思います。また播かれたばかりの種子、植えられたばかりの若木もありましようが、必ず感謝の花となり実となるものの多々あることを想うのであります。

新島先生の日記に、先生が同志社に関して常に心に銘じ忘れられなかつた三条があります。それは、「(一)我等の礎石たるキリスト、(二)良教師、(三)精良な器械、この三つのは我が校の光なり」と。これは今日なお尊重されなければならない光であります。同志社教育に適わしい良き教師がなければ指導者なき学園にひとしく、優良な設備、教材がなければ教育研究の成果を期待することは困難でありましよう。

歴代の校長はこの三つの光を尊重し、護り、ねらいとして最善を尽されたことに今さらながら思い当るのであります。私もまた、先輩校長にならないこの三つの光を堅持しつつ協力を得て重責を果たす覚悟であります。

画竜点睛―卒業式に―

風雪を侵して開らく寒梅のごとき卒業のみなさんは多数の優秀な志願者から特に選ばれ、歡喜と誇りと希望に満ち入学された日から三年または六年、神の恩寵、近親者、先生方の協力援助、各人の努力と精進の結果、科学的、合理的判断と処理に役立つ豊かな知識、技能を修得され、この栄ある日を迎えられることは無上の喜びであります。

昔、中国の名人張僧侶が壁に竜をえがき、最後に睛（ひとみ）を描きいれると、たちまちその竜が天に上ったと伝えられる故事があります。これは最も大切な一点に筆を加えて物事の完成を意味するものであります。古来これを画竜点睛といっています。修得した知識技能が優良、豊富であっても、それだけでは同志社に学び、卒業の資格があるとはいえないと思うのです。いわゆる画竜点睛を欠くからであります。その大切な一点とは、即ち新島精神であるキリスト教精神に基づく教育であつてこれを自覚しなければ同志社教育をうけたことにはならないのであります。さらにまた、それを自覚したとしても画竜点睛は型だけであつて、必ずしも天に上る動的生命をもつものとはならないのであります。その生命はどこから生ずるのでしようか。

かの彫刻家ロダンは「あらゆる生命は一個の中心からわき出る。そして内から外へと向つて芽を出し、花を咲かせるのである。それと同様に、よき彫刻においては、我々は常にそこに内部からの強き力を感じする」と述べていますが、同志社人の躍動する生命のわき出る中心はキリストであると思考するのであります。そのキリストなる中心につながるとき、生命が内から外へと向かい、同志社の卒業生としての芽を出し、花を咲かせ、実を結ぶことができるのであつて、これこそ同志社人としての真の画竜点睛であります。

前途には、ときに雨、嵐、雪あり、若き芽がいためられ、花がそこなわれ、実が落されることもありましようが、学びの場において家庭、実社会にあつてキリストからわき出る生命を堅く信じ、同志社の卒業生として世のため、人のために奉仕し、人生行路を強く進んでいただきたいのであります。

同志社とは―入学式に―

新人生のみなさんは小学校のあるいは中学校多数のうちから選ばれ、さらに本校の困難な入学試験に合格し、喜びと誇りと感謝に満たされていることと思ひます。

入試面接の際、同志社志願の理由をたづねましたところ、同志社は英語が優れているから、と答えた人が少なくなかつたのであります。確かに本校は他校に比して優れているところもあり、特徴もある学園であります。熱意と期待をもつて日々の勉学に励み、世に役立つ人になっていただきたいのであります。

創立者新島先生は約百十年前危険を冒して渡米、その目的は科学

的知識を修得し、祖国日本のために尽くすことにあつたようでありま
す。ところが、欧米の文化は単に表面に現われた科学の力だけでは
なく、それを生かすキリスト教精神がその根本となつてゐることを
悟られ、これこそ祖国を救ひ、強力にすることができると確信され
たのであります。その精神を基として設立されたのが同志社であり
ます。同志社に学ぶ者はそのことを自覚し尊重しなければなりません。

学識経験豊かな英文学者福原麟太郎氏は、彼の「人間形成と教育」
のうちに「日本は明治の初め欧米文化を採り入れたが、その根とも
いふべき精神をとり入れなかつたのが大きな禍となつた」と述べて
います。同志社教育とは、その根である精神を基とした教育であり
ます。人類進歩の偉大な力である科学的知識の修得増進に励むこと
は、生徒としての大切な義務であります。と同時に重要なことは、
その知識・技能を真に正しく生かす根本的精神を養ひ、同志社教育
の実を立派に結んでいただきたいのであります。

数年前、ある同窓生から一枚のはがきがよせられました。「二人
の子供の母となつたが同志社でうけた教育、ことに毎朝の礼拝で学
び与えられたものは私の生活の力となつてゐる」と。編入生は「礼
拝は身の心も清められる思いがする」、最近の転校生は「みんなが
熱心に勉強している。また、みんながうつくしい（気品がある）こ
とに驚き感心した」と。ある教育者は同志社の女子中高生は清く、
明るく、美しい感じがする。どことなく気品がある」と。これらは
全面的には肯定できないかもしれませんが、その色彩は濃厚であ

り、本校の特色でもありません。ここにその光彩を放つよう努力
を重ねたいと思つてゐます。

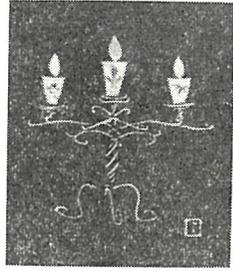
学校教育の進歩充実に欠くことのできないのは、実力ある良き教
師と設備であることはいふまでもありません。最近、研究費の飛躍
的増額を計り、一層の研修、研究の実を挙げるため、それが適切に
利用されています。また、多年必要に迫られ、同窓会がその主力と
なり協力をいただいている鉄筋五階建の新平安寮がすでに着工、十
二月竣工の予定であります。この二つのことは、今後の教育指導に
良き影響をもたらすものと確信しております。

数年來待望、これまた必要に迫られてゐるのが第二黎明館の建設
であります。これは、黎明館完成のとき、運動会もできる運動場の
実現をもかねた計画として、その建築準備が進められてきたのであ
りますが、学内の建設地問題に阻まれ、今日にいたつてゐることは
遺憾であります。しかし、これは資金上時期的にも、教育活動の面
からも、また高校將來の発展の上からも、問題の解決を急ぎ、建設
されなければならぬものであります。

更に思うのは、女子短大のことであります。女子高の大多数は同
志社大学、女子大学に進みますが、その適性にしたがつて短大へ進
学する者もかなりの数になっております。ここに同志社女子短大の
必要を感じます。その道が備えられるならば幸いと思つてありま
す。

これからの女子高校の道は峻しいと想いますが、輝く若き瞳を前
にして、指導協力を得て時代に適わしい歩みでありたいと念じてお
ります。

（女子中・高校校長）



心の持ち方

クルト・
ブラッッシュ

京都で生まれ、京に育った私は、商用で次々と海外から来る客の関西案内に、京都見物を必ず旅程に入れることにしている。日本に始めて来た人は興味深く、また、楽しく京を見て行かれるのが通常であるが、中には寺院を二、三見れば、「お寺っていうものは皆同じようなものでしょう。それよりもナイトライフを見た方が現在の日方がよく理解出来るだろう」という人もある。だが今までの経験からいえば、私の案内の対象を熱心に見、色々な興味を持ち、少しでも予備知識があれば、なかなか突込んだ質問をする。

彼らにとって最も不思議に映ることは、どうして寺院内(仏)にお宮(神)があり、また、神に祭られている不動明王が、どうして恐しい容貌、いわゆる「忿怒相」で表現されているのであろうかというようなことである。この種の質問に対しては一応説明は出来るが、中にはなかなかむづかしいことを聞く人もある。今その一例を挙げると、日本を代表する思想、即ち日本的世界観はいかなるもの

かという質問である。

日本には、たとえば文学史とか、文化史とか、仏教史とかいう個別的な研究の伝統はあるが、時代の知的構造や世界観の発展などを年代的に説明した書物はあまり見当たらない。江戸初期には儒教や国学や神道の研究が盛んに行なわれたが、それらの相互関係の歴史の変遷を辿るような研究は余り多くない。もっとも、日本には西洋哲学に匹敵するような世界観や自然科学は生まれなかったし、また老荘や儒教の思想である無為主義や虚無観も、中国から仏教や文化が移入されるまではなかった。では日本的世界観とはなんであるかと問えば、何もないというより他はない。否、何もないのではなく、「ないもの」があるのである。それは禅で重要視されている「無」でもなければ、中国的虚無観でもない。この厄介な「ないもの」の正体を掴まないと日本の世界観というよりも、日本人のものの考え方が(ないもの)の正体がなはであるかは充分に掴えていない。しかし、先づ考えられることは、日本人は古来の伝統思想と近代の西欧化された外来思想とを無関連的に蓄積していることである。この「無関連性」があるということが、「ないもの」があるということにもなるのである。「不立文字」を標榜する禅にせよ、「虚無恬淡」を説く老荘にせよ、これらの思想は古来より日本人には意識的または無意識的に頭脳に潜入している。仮に今、重いものを持ち上げる際、人手を頼めば、その人は「では、ない力を出して持ち上げて見るかな」とか、または、何かむづかしいことを知人に尋ねると、「よし、それではない智恵を絞って考えるかな」と答える。この「ないもの」がどこから出てくるのであろう。そこにはやはり

「ないもの」があるからである。甚だ矛盾してはいるが、この矛盾が矛盾として通らない限り、人は矛盾とは感じていない筈である。

日本にはまた「あるもの」をわざとなくす風習もある。素晴らしい御馳走に招待して、「なにもありませんが……」というのもその一例である。もつとも、これは謙遜な意味からではあるが、その起因は伝統的な「滅私奉公」の精神に基づくのである。とにかく、考えれば考える程不思議なことが多い。

二

西欧文化と中国・日本などに見られる東洋文化の性格とを対比して見ると、前者は明かに積極的、能動的、人工的であり、後者はその受動的、自然主義的な点を特色としていることは誰しも気のつく処である。勿論西欧文化には一面基督教の精神というものが主流をなしており、これが人力以上のものに対する敬虔な服従を教えたことはヨーロッパ文化を柔軟性ある二元的（神と人）なものとならしめた。また理窟を抜きにしたような分り易いキリスト教の方が哲学的な仏教よりは言挙げの嫌いな日本人の肌には向いていそうにすら思われる。もう少しつめていえば西洋は生に對する執着が激しく、しかも頭脳は科学的でありまた創造的であり、物に對する態度がすべて動的でもあり活発でもある。そこからファウストのように永遠の青春をあこがれる気持が生まれるのである。

欧州においては哲学（ギリシャ哲学）と宗教（グノーシス派）とその起源を異にしている。この異なった二者は多くの宗教家の努力により神学として統一し、三一三年に到ってコンスタンティヌス

帝の勅令にもとづきキリスト教信仰が公認された。そして長い間の地下潜行時代が終った。しかし、異端との論戦折衝の難事を遂行し、初めてキリスト教を綜合、そして教会統一のために献身したのはアウグステイヌスである。

アウグステイヌスは、「人間は自分の力で墮落から救われるのではなくして、全く神の恵みによってのみ救い出されるのである」と彼の著「告白」に認め、彼は罪深い自己が、罪の赦しと神の愛とを、キリストによって持ち得たときの心の慰安を、敬虔に且つ熱情的に語って人々の心を打った。ここに神と自己との二元的存在が現われたのであって、このような二元的思索は欧州哲学によく見受けられるところである。これに反し仏教では「一切仏の法」といい、「法」（仏法）に覚醒したものを仏という。仏の原語である仏陀即ち Buddha とは覺者のことである。禪という「直指人心、見性成仏」は、法を心外に求めずして心内に求め、自己本心を指摘すべきであるかと教えているのである。この「直指人心」は、直ちに自己本心（仏心）を突きとめて、自己の本心仏性を徹見実証する（絶体者に目覚める）を意味しているのである。すなわち自から自性の仏であることを悟るのである。これが成仏することであり、「見性成仏」と表現されているのである。この境地が悟りであって、そこには自他の対立なく豁然として宇宙が開け、そうして悟りえた心が仏である。自己本心が仏である以上、そこには仏と我というがごとき二元的理論は成立しない。かくみ來るとき二元は一元に帰着するのである。この二元的思想、即ち「唯一絶体」の境地を端的に表現しようとすると、いきおい禪でいう「無」「無我」の境地というものを強

調しなければならなくなる。

「無」や「無我」は禅のみに限られた語ではなく、道教、特に老荘の思想にもこれが見受けられる。しかし、老荘説のように形而上学的な無とか、無我とか、虚とか、無為自然とかいうことは日本ではあまり考えられなかったし、また、印度人のように空や非空や無明などというような本体論の解明についての否定の連発に頭をひねったこともなかった。

三

無とか無我という表現で思いたされるのは「同志社時報」第三号に掲載されていた新島先生の次の言葉である。

「人間の偉大性は彼の博学によらずして無私による。博学なるものは無学なるものよりも利己的になりやすい……」

自己を忘れよう。そして無代償で真理のために自己を献げよう。」私には新島先生の用いられた「無私」という言葉の概念がハッキリしない。先生は恐らく十四世紀におけるドイツ基督教神秘主義を代表するエックハルト (Meister Eckhart, 1260-1327) の言葉を指摘されたのであると思う。エックハルトの思索の中にはトマス説の要素が数多く見出される。しかし、彼は「ディオニュシオス偽書」やスコットゥス、エリウゲナの新プラトン主義に従って、神の無制限性に対しては「存在」を帰するよりはむしろ「無」とすべきであると考えていた。世界は無から創造されて再び神の無に帰するのである。我々の精神も根底においては神に属するのであって、我々は自己否定の道によって遂には神と直接に交わり、神に語りかけ、神の

言葉を聞くことが出来るというのである。この根本思想となる「自己否定」なる語は仏教よりも儒教の語である「無私」に相い通ずるように思われる。また、そこには仏教に通ずる「無」や「空」の思索もあろうが、ヨーロッパの場合では、その思想が、その哲学体系の全面を覆ってしまふほどに、無や空の思想がゆきわたってしまふものではない。ところが、仏教では、それが全仏教に及んでいるのである。

パウロの言葉に「生きているのは、もはや私ではない。キリストが私のうちに生きるのである」(ガラテア書二章二十節)とある。この表現は神を完全に否定したのではない。否、神たるキリストと私を同一視すべく試みたのであるが、神と私とはどこまでも二元的に存在していて一元に帰してはいない。

これに反して、臨済禅では「心即是仏」とか「心外無仏」といつて、仏と自己とは一つであり、仏というものは空間的にも精神的にも外にあるものではなく、心の外に仏を求めたならば、真の仏ではなく、自己の外の仏は観念的な仏であると教えている。

唐代の臨済禪師は「偈若し仏を求めれば、即ち仏魔に撰せられん。偈若し祖を求めれば、即ち祖魔に縛せられん。偈若し求むることあらば皆苦なり」といつて、念々に動く心、馳せ求める心、執し著する心それらを悉く無くしてしまえば、その心境は祖仏と別なるものではないと主張している。外に向つて法を求めようとすれば、それはただ文字に記された教論や経文を知るに過ぎない。それで臨済はまた「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し……親眷に逢うては親眷を殺して、始めて解脱を得ん」と叫んで彼の徹底し

た思想を發揮している。

仏教、儒教、老荘では無我、無私、忘我とそれぞれ異なるが、人間で非人間を条件とした人間であるという点においては共通して否定されている。仏教でいう「無我」とは一切煩惱の根本である自我の念を没却することを意味し、執著より脱却して融通無碍であることとして心の鏡に一点の曇りもないことをいうのであって、凡てをありのままに写すことである。

老荘というよりも莊子にしばしば説かれる「忘我」は主観と客観との完全な一致であって、寧ろ主観が客観に埋没して主観それ自体が姿を一時隠すことである。しかし、我の形においていつも働いている主観は、客観に移行すると同時に、客観それ自身の働きが今までの主観に対立する客観としてではなく、ある違った色彩を帯びて我々の自証に反映するのである。即ち、忘は一面において我の客体に向つての没却でもあるが、また、他面において我の拡充でもある。

四

忘我とか無我とかを簡単に説明することは至極困難であり、また、東洋哲学の中からこのような自己否定の言葉を探せば殆んど際限がない。今ここでそれを試みる意志はないが、さりとて日本文化を解しようと思えばこれらの概念を徹底的に解明しなければ明瞭を欠く。無我は仏教と外道との教理の別を知る三種のしるし、即ち「三法印」の一つであって、この三つの法印とは「諸行無常印」、「諸法無我印」、「涅槃寂靜印」のことである。平家物語の巻頭に

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を示す。傲れる者は久しからず、春の夜の夢の如し」と詠われている。これが宇宙の法則であって、仏教の教もこの「諸行無常」ということを基礎として考えなければ、その真髓は捉え得ない。宇宙のすべての現象は変化し、すべての存在も各刹那毎に転々として生じたり滅したりしている。同じ存在が二刹那以上継続することはあり得ない。継続するかに見えるのは刹那と刹那とのつながりであって、それはあたかも映画のフィルムの一コマが次の一コマへと次々に写り変わる活動的な現象を示しているのと同様である。

ここに人間的な哀れさが感じられる。しかし、もしこの世を無常と思つても、我慢ができるとすれば、それは仏教徒のように後世を信じ得られたからである。何れにせよ、この無常観は「源氏物語」にも現われている「あわれ」という表現にも通ずる。すなわち本居宣長のいう「ものあわれ」と同意で、心にしみて感じさせるような情趣であつて、それは日本人でなくては着想し得ない美意識の最上理念でもある。

「ものあわれ」は文学上の言葉であるが、この美意識には日本的な哀愁感メランコリアが多分に含まれている。

日本の哀愁感やセンチメントについてはまだまだ語りたい点があるが、今は紙面上余裕を持たない。藤原時代の大作「源氏物語」の「ものあわれ」にはまだ高度のユーモアや浪漫的な甘さが含まれているが、鎌倉時代の「徒然草」や「方丈記」では同じ無常観でも一種のニヒリスティックな意味として現われている。徒然草の著

者兼好は、現世の生活を一時の仮りものであり、はかないものと見、「方丈記」の著者長明は、現世の幸福が、かりそめのものであると説いている。時代の流れと共に無常観はまた厭世観へと移行して行き、そして「人間は本来、苦なり」として諦めるのである。「あきらめ」という言葉はブルノ・タウトもいつているように日本人を最も特長づける心理根拠の表現語でもある。それはよい意味においては日本人の非常にあっさりしていること、また、ネガティブの面においては根気のないことを現している。

諦めとは失望とか絶望とかを意味する「断念」ではなく、初めから最悪の場合を覚悟して、それに対策用意することである。また、覚悟も「あきらめ」ではなく、その文字が示すごとく悟を覚することである。

五

日本中世文学、文芸に見られる「あわれ」「悲しみ」「諦」は近世に到って「涙」「泣く」の義理人情を中心とする所謂江戸時代を代表する文芸中に窠児として登場するのである。ここでいう義理という言葉は色々な意味をもっているが、それを十分に理解し得ないと日本人の心的状態や日本的強い感情というものを把握することは不可能といっても過言ではない。

ヒューマニズムという言葉は人道主義とか人文主義とかに訳されていて、その概念は西洋にも同様に取入れられているが、実は内容的に東西において大分隔りがあり、完全に同一視することは出来ない。欧州の原語の意味は別として欧米で用いられているヒューマニ

ズムという語と日本のそれを比較した場合、前者は公德のヒューマニズムであるが、後者は義理のヒューマニズムである。

義理人情といえば浪花節を思い浮べる。諺にも「難波の事か法ならぬ」とあって、これは「歌うも法の声」と同意である。即ち、歌うことも舞うこともすべて仏の功德をたたえる因であるという意味であるが、義理と法とは立てなければならぬというのが日本の考え方の通常である。儒教の「五倫」で見る人間の基本的関係は君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友であって、これらの関係は上下のつながりにおいて義理というものが活躍している。しかし戦前までの上下関係は「朋友」以外の四つに結びつけられていたが、終戦後には父子、夫婦、兄弟、朋友のつながりは上下よりも左右関係の道德精神へと発展するようになった。

道德関係が縦のラインから横のラインに変化して行ったとしてもそこに結ばれる道德関係は欧米のごときアカの他人の間にも存在するモラルではなく、身うちの人が知人の間のみを結ぶ道德である。従って、これら（身うち、知人）のグループからなる社会のモラルも公共の道德ではなく、義理のモラルである。即ち社会における個人に対してではなく「世間」に対する所謂「世間体」的な義理のヒューマニズムでもある。だから、欧米のごときアカの他人同士から構成されている公共道德と同一視することは出来ない。

また、日本人の家庭は欧米のごとき「夫婦を中心」とする生活ではなく、家長を中心とする家族関係的な義理によるせまい世間体という束縛を受けた生活を営んでいる。これも日本人として哀愁観や厭世観を呼び起させる原因の一つではなからうか。

公共道徳心が日本に今だに欧米のごとく発展していないことを、公共道路、観光地、公園などに処かまわず捨てられている紙屑や折箱などのものが示している。特に公園などにはチャンと紙屑入れが備えられてあるにもかかわらず、それを余り利用しながらない。また、汽車や他の乗物内でラジオの高音でなすことが他人に迷惑であるとは思っていない。アカの他人は眼中にないのであろう。人に迷惑をかけないようにとよくいうが、これではまだ余りにも消極的である。「人に迷惑をかけさせないように」全員が努力すべきである。

公徳に対しては親が子に充分教育せねばならない。一般には教育というものは学校でやるべきものであると考えられているが、実は学校教育は学問のためのものであり、教養を中心とする教育は家庭でやるべきものである。動物園で子供が猿にイタズラをしているのを見ている親が、「猿をいぢめるとおじさんに叱かれますよ」といって、あえて子供のいたずらを止めようとしめない。動物をいぢめることが悪ければ、親がすぐにでもとめるべきである。親が子供のイタズラを無視している間、即ち監理人のおらない間は、子供は別に悪いとは思っていない。このような躰は断然避けるべきである。公徳に対する日本の欠点を大々と書きあげたが、これが日本的義理人情の悪い面である。子に対する人情も度をすこせば、あまやかしとなって返って子供のためにはならない。

六

いうまでもなく、我々は人間として生きているものである以上、

人間本位、または人間性を中心にものを求めたり、考えたりすることが自然でもあり、まともな態度でもある。しかし、そのことは我々の絶体不可避の運命であるばかりではなく、また、恐らく「間違つた」態度ともいえないであらう。しかし人間があつて世界があるのではなく、世界があつて人間はあるのだ。だから我々が只ひたすら人間的であり、人間性に従ふことのために、世界の存在と機構とが直ちに人間自己本位に都合よく出来ているものと考えることが間違である。自己本位の見方は忽ち矛盾にぶつかる。神とか造化とかいうものがあると認めて、それと被造物なる万物との間には、何か「一つの自己」としての有機的關係、即ち、調和があるべき筈だと考えても、天災とか、悪人榮えて善人不倖なることの稀でない世界の現実相をそのまま大きな調和であると達観し得るためには、余程深く内面的（内省的）にその全体の關係を觀することが出来るようにせねばならない。もとより自分たちの御利益のために存在する守護者、体のいい奴僕であるが故に「神」は有難いというような、勝手な虫のいい迷信を抱いたりすれば、手敵しい裏切にあうのが当然である。だからキリストは祈りの第一として、神が「御名をあげめさせ給え」ということを挙げ、それが自分達にとって禍にならうと何にならうと何にならうと、神は先づ神自身のためにあり、振舞うことが人類なる一つの種にとつても福なのだ、「貪しい心」をもつて信仰すべきことをさとしているのである。その信心が真実な徹底したものであれば、「神は愛なり」という形而上学的にも真理である世界の機構の大調和も解るのである。

世の中に矛盾がなければ悲しみも、楽しみもない。しかし、矛盾

がある以上人間は Positive の面を見つ、Negative の面を見るべきではない。ポジティブ面を見ても、矛盾が自己にある限り、矛盾は依然として解決されずに矛盾として残る。しかし、ものは見方である。例えば一本の酒瓶がある。もし、瓶の中に酒が半分しか満たされていらないとしたら、楽道家はそのある半分を見て「ああ良かった、まだある」と喜ぶが、悲観家はない半分を見て「なんだ、もう半分しかないじゃないか」と嘆く。同じものでも見方によっては楽しみとも、悲しみともなる。これはただ心の持ち方一つであって、人間が務めて心を Positive 面に切替えるべく努力すれば、矛盾であっても、その矛盾は自分を迷わさない。

時間というものは刻々と進みつつある。いそがしい人は時間が無い、ヒマもないといって嘆いているが、時間は絶体に待ってくれない。貴重な時間がそれほどほしいならば、それを捉える外はない。はいかにしたら時間を捉えることが出来るか。その答えは至極簡単であるが、実際には相当の熟練とエネルギーとが必要である。では時間を捉えるための秘訣はどこにあるかといえば、これもただ心の切替にあるのみである。即ち、自分の心を一つのものから他のものにならうつし替えることである。勤務上の仕事に追われている人が、その仕事をキツパリと止めて自分の趣味や楽しみに心を切替え、しかも切替えた瞬間には前のことをうち忘れ、新規に出発することである。心の切替、頭の切替が我らの人生にとってどれほど大切であるかは、あらためて述べる必要はないと思う。

(校友、K・ブラッシュ商会社長、「禅画」の著者)

昭和39年度

同志社女子大学入学試験案内

(1) 募集学部

文学学部 (英文学専攻・音楽専攻・家政学専攻)

(2) 願書受付期間

第一類 (書類審査) 12月16日—1月31日

第二類 (筆答試験) 2月5日—3月2日

(3) 入学試験日 (第二類) 昭和39年3月9日・10日

試験場 同志社女子大学

(4) 入学試験科目

国語(甲)、英語、理科(物理、化学、生物、地学)

※理科については家政学専攻志望者は四科目中二科目、英文学、音楽専攻志望者は一科目選択受験する。

※音楽専攻志望者は実技試験を行う。

入学案内 〒とも90円(切手可)

京都市上京区今出川寺町西入ル

同志社女子大学教務課